

グローバル人材育成における日本語教育の役割

—大学における現状を踏まえた一考察—

大石 寧子

OISHI, Yasuko

徳島大学国際センター

要旨：昨今、「大学のグローバル化」のもと各大学では英語教育の充実をはじめ、様々な試みが繰り広げられている。長きにわたり留学生を軸として授業を展開してきた日本語教育は、この流れの中で何ができるであろうか。現状を整理し、グローバル化人材育成の中での日本語教育の位置付けと役割について考察したい。

キーワード：グローバル化、グローバル人材育成、協働、サポーター、気づき 思い

1. はじめに

大学の国際化、グローバル化が言われてから久しい。2014年に文部科学省によって「スーパーグローバル大学」事業の公募があり、トップ型16大学、グローバル化牽引型24大学が選ばれてから、各大学では更に具体的な取り組みが行われている。徳島大学でも同様に、英語教育の充実を図る、海外への留学を促すなど具体的な方策が来期より更に大きく動き始める。

グローバル化を促すための日本人学生のグローバル人材育成とは何か。文部科学省（これ以降文科省とする）によって「異文化を理解し踏まえたうえで、グローバルな舞台に積極的に挑戦し、活躍できる人材」と定義されている。

留学生を軸に展開している「日本語教育」は、この日本人学生のグローバル人材育成にどのような係わり方ができるか考察したい。

2. 大学の日本語教育

2.1. 国際センターが実施している日本語教育

国際センター（これ以降センターとする）では徳島大学での全ての日本語教育を行っている。大別すると3つに分けられ、1）日本語そのものを教えるコース：①日本語研修コース（集中講習型）②全学日本語コース（レベル別週2回実施型）、2）日本語を道具として調査・発表・活動等を行うコース：①「日本語1」～「日本語8」②日本事情Ⅰ～Ⅳ③共創型学習「国際交流の扉を拓く」3）日本語教員養成に関わるコース：①日本語教授法Ⅰ・Ⅱ、②日本語教育方法論Ⅰ・Ⅱ、③日本語教育演習／教材研究（実習型）がある。また地域対象に公開講座「国際交流ボランティア入門ー外国人に日本語を教えるとは」のようになる。これらの中で2）は全学共通教育センター枠で、3）は、公

開講座以外、総合科学部枠で単位を出している。これらのコースの中からいくつか例を取出して、グローバル人材育成の視点で具体的に内容を見ていきたい。

2.1.1. 「日本語」そのものを対象とするコース例：「日本語研修コース」

集中講習型の本コースは、文科省の国費留学生（旧名、大学院入学前予備教育）を軸に本学の大学院生及び研究生を対象としている。月～金曜まで1日4.5時間で約6か月、計430時間前後を目安とし、日本語を初めて学習する学生に、初級修了または中級下の習得を目標とし、①大人として大学内外での日常生活がごく基本的ではあるが一人で乗り切れる②専門への橋渡しを到達目標としている。本センターでの日本語教育は、知識に止まらず実際に四技能が使えるように徳島大学で行われているどのレベル・コースに関しても「運用力」をつけることを目標としている。言葉はその国の文化・習慣をはじめ常識・マナー・考え方などを背負っているので、運用力を支えるために日本独特のこれらをいろいろな形で授業に盛り込んでいる。丸暗記した文を言うのではなく、会話がなされる状況（situation）に基づき、その状況が持つ日本・日本人の文化・習慣等をふまえて、既習した文型や語彙・表現を各自が自力で使えることを目指している。

本コースでは、センターの日本語教育支援をする「サポーター」の導入も可能な限り取り込み、練習や会話・タスク相手、文字の補講、スピーチ練習等レベルによって内容はさまざまであるが、クラスに入って、個別に対応する。例えば初級の動詞変換の場合、あと少し時間をかければ十分な正確さと流暢さが得られるが、その日のシラバスの関係上それが難しい場合、授業の最後にサポーターと学習者がマンツーマン

マンで、動詞の変換練習を 20 分するというのは、非常に効果的である。まずは自分のスピードから始まり、慣れて行くにしたがって通常のスピードにするなど学習者主体の練習は、精神的負担が少なく、最終的にはかなり成果が得られる。このやりとりを通して、もっとも効果的なことは、日本人を前にして、日ごろクラスで触れている日本・日本人の習慣・マナー・考え方などについて実感が得られることである。例えば日本語の会話の特徴の一つに「相槌」があるが、サポーターとの練習時のやり取りでサポーターが打つ相槌を見て、相槌の打ち方やタイミングやそれに伴う表情などを得て、実感をもつことができる。

一方、サポーターにとっては、伝わず語彙の問題ではないと感じたとき、そこに異文化から来る違いを感じ取り、異文化を実感する。そして共に現状を乗り越えたいという仲間意識が生まれ、この協働を通して最終的には双方に連帯感・達成感が得られる。

本コースの場合は、授業の中では日本語だけであるが、終了後は学習者とサポーターが英語を交えて会話をしたり、授業外で約束をしたりすることは関知せず、大人同士として本人達に任せている。双方にとっていい意味での人的ネットワーク作りにも発展していると思える。

2.1.2. 日本語を道具として、調査発表等をするコース例：「日本事情Ⅲ」コース

学部1・2年生を対象とする共通教育の中で、留学生対象の「日本語」「日本事情」をセンターは担当し、共通教育センター枠で単位の授与をしている。ここでは、「日本事情Ⅲ」について考察したい。本コースは前期に行われ、後期の日本事情Ⅳとともに「日本・徳島を知る」を主テーマとし、前期は、「子供の遊び」を、後期は「小学校教育制度」を副テーマとして、①調査・発表②専門家の話を聞く③小学校での調査・実践を行う。

日本事情Ⅲでは、授業の前半は中心テーマの「子供の遊び」について行い、留学生は①自国と日本の遊びの比較を通し異文化を理解する②調査のためのアンケート作成・自国の遊びの説明書作成・発表を通し日本語のスキルを身に付けることを目標としている。

まず日本人なら誰もが知っている「日本の子供の遊び」をアンケートで調査し、回答集計後理解のできない遊びについて日本人学生からなる学生サポーターからその遊び方などの聞き取りを行う。全く予想のつかない日本独特の遊びがある一方、自国にも同様な遊びがあることを知り、日本と自国の距離や文化

の流れを知る。次に「自国の子供の遊び」の遊び方の説明書を作成する。この間、学生サポーターと留学生はペアになり、子供の遊び特有の掛け声や語彙や表現を学生サポーターから獲得し、遊び方の説明書を作成する。学生サポーターにとっては、ペアを組みながら、日本の文化を振り返り、自国との相似・違いを感じながら協働スタイルで、ともに完成に向かう。

現在、グローバル化の一環として小学校では「国際理解教育」の授業が行われている。徳島県教育委員会と連携し、この国際理解を子供の遊びを通して支援することとした。

コースの後半は、この支援を最終活動として、①「子供の遊び」のほかに②各国の小学校情報を含んだ「お国紹介」③各国語挨拶の練習④各国の学校文化（今回は中国の「目の体操」）の4つをパッケージにして留学生と学生サポーターがペアになり、実施した。事前準備としてペアになった留学生と学生サポーターは小学校での発表や遊びの際の役割や手順の打ち合わせを行う。今年度は実際に授業内はもちろん、授業外でも積極的にそれぞれのペアで行った。一方小学校との連携においては、事前に本コース担当教員と小学校教員が打ち合わせを行う。実はこの打ち合わせが小学校児童の気づきの一步を導くと思われる。留学生が実施し、児童がただ受けるだけの受け身ではなく、児童達も積極的に国際理解に関われるように、事前に留学生達の国について調べたり、自分達で当日何ができるかをクラスで話したりといろいろな方策が考えられる。大学には専門分野の研究が多岐に渡りあるうえに留学生、協定校などを通し、さまざまな情報にあふれている。この打ち合わせは、小学校側にその情報を提供し、国際理解を教員の立場で支援する貴重なときと思える。当日、児童達はさまざまな活動が日本語で行われるため垣根が低く、誰もが子供本来の興味を持って受け身でない体験をし、異文化を理解するとともに留学生の日本語に刺激を受け、児童の外国語習得意欲や外に目を向ける気づきの一助となる。児童からの感想文の中に「留学生の日本語での説明が上手で驚いた。自分も外国語が話せるようになりたい。」「日本語が上手でかっこいい」などが予想以上に多く見られ、留学生の支援がきっかけとなったことがうかがい知れる。これがこの試みの大きな成果だと思える。

また留学生は自国の小学校との違いを話だけでなく実感し、日本の初等教育方針を感じ取

る。これまでの留学生からは「日本の小学校は、上履きをはじめ掃除・給食などいろいろな点できめの細かい対応がなされている。情操教育にも力を入れているところがいい」などの声がよく聞かれる。

2.1.3. 日本語教員養成に関わるコース例： 日本語教育方法論Ⅰ

総合科学部の副専攻である「日本語教員養成に関わる科目」のうち、日本語を教える現場を持っているセンターゆえに受け持てる科目、1) 日本語教授法Ⅰ・Ⅱ、2) 日本語教育方法論Ⅰ・Ⅱ、3) 日本語教育演習／教材研究(実習型)の計5科目があり、総合科学部枠で単位の授与を行っている。学部日本人学生が対象であるが交換留学生で日本語学科の学生達が毎年参加している。

本コースの受講目的は、①日本語教員を目指す②将来海外または外国人と一緒に働きたい③なんとなく興味があるなどである。授業内容は、レディネスやニーズの調査方法、カリキュラム・シラバス・音声・表記に關しての授業をはじめ、クラス展開、教案、宿題、評価などを扱うが、外国人がどのような過程を経て日本語を身につけていくか、どのような気持ちの変化が生じるか、また授業に日本文化・習慣・考え方などをどうのせていくかなどを考える。

毎回のクラスは、前半は教員の講義で、後半は、日本人学生と留学生で小グループを作り課題を遂行し、最後に各グループの発表を行う。これらの作業は日本語教師を目指さない受講者にとっても得るものが多く、日本語をいかに教えるかを通し、日本語・日本人の特性を知り、今までの視点よりさらに異文化理解や海外へ向ける目が広がる。

2.2. 日本語教育に関連する活動

2.2.1. サポーター制度

センターでは日本語教育から派生し、留学生と日本人(学生・地域)に対し、色々な働きかけをしている。その中のいくつかを振り返りたい。

2002年の国際センター設置時にセンター業務の1つに地域の国際化があった。日本語教育の役割として「日本語を母語として習得した者がどのように運用すれば非母語話者にとって理解しやすく、円滑なコミュニケーションができるかという、日本語母語話者の非母語話者に対する日本語運用、日本人の異文化コミュニケーション能力向上の問題にも日本語教育が係わっていくべき状況に來ている」石井(97)と言われている、「地域の日本語教育」が言われ始めた時期でもあった。

本センターには、2.1.1～2.1.2で既に語られ

ているように地域住民からなる地域サポーターと本学日本人学生からなる学生サポーターの「サポーター制度」があり、初級クラスでの動詞の変換練習や会話相手から上級クラスでの調査項目の調査相手など各日本語コースの様々な要請に応える。最近ではスタディ・ツアーやサマープログラムでのピア・ワークなどと活動が広がっている。いずれも留学生と日本人の協働のスタンスで双方に成し遂げたいという気持ちが生まれ、連帯感へとつながり、相手に対し親近感が育まれる。これが異文化理解の一步となる。また双方にとって人的ネットワークを広げる機会にもなる。現実はこの活動を経験し、自ら留学する日本人学生が毎年見られる。

2.2.2. 大学と地域の国際化シンポジウム「徳島から世界へ、世界から徳島へグローバル化をめざして」

センターでは、これまでさまざまな内容・形式で本学学生・教職員や地域に対しシンポジウムやワークショップ等を行ってきた。本学は現在グローバル化に向けて様々な試みを実施・計画されている。この時期にセンターは、グローバル人材育成のために本学学生及び地域全体の底上げを図るため、誰もが理解でき関心が持てるよう使用言語を日本語として、まずは外に目を向ける動機づくりを試みた。対象者を本学学生・教職員、地域とし、今回はこの地域の中に小～高校生及び教職員も含めた。これに関しては徳島県教育委員会の協力を得た。留学生と日本人が意見を交わし、情報交換をすることで、日本人にとっては、外に目を向けるきっかけになり、留学生にとっては日本語で意見をいうことで大きな自信になると考えた。3部構成として、以下のように行い、126名の参加を得た。

第Ⅰ部

- 10:00 講演「私の人生と留学の係わり」日本人・留学生のOB各1名による
- 11:00 パネルディスカッション「自分にとっての留学とは」留学経験のある日本人学生3名、留学生3名及び講演者2名、計8名による

第Ⅱ部

- 12:00 「世界の料理体験」8か国11名の留学生による料理の説明及び試食

第Ⅲ部

- 13:00 ①ポスター発表「私の国で紹介したいこと」中国2、韓国、台湾、スウェーデン、ラオス、ウガンダの10名の学部学生によるテーマを絞った自国紹介の発表

②「自国の子供の手遊び」中国・ベトナムの留学生（児童を主な対象として）

参加対象者を上記のように従来より大幅に広げたので、参加者がⅠ部からⅢ部の間でそこかしこで留学や異文化のテーマの下、本学教員と、留学生と、日本人学生と、高校生と、と自由に言葉を交わしているシーンが多く見られた。アンケートで多かった意見は、①前向きに挑戦している人との出会いがよかった。②留学は、自分の世界を広げる方法だと思った。留学することで、日本でずっと暮らすままでは変わらない価値観が変わったり、考え方が変わったりするのだと思った。日本のいいところを知って発信することと、世界の文化を知って受け入れることの両方が大切だと分かった。③留学への手立てをいろいろと知ることができ、勉強になった。など参加者に対し、外に目をむけるための気づきと共に具体的に留学の手立てを提供できたと思われる。また中には親としての次のような意見もあった「自分自身は、語学力や経済的なことなど慎重になりすぎて留学のチャンスを逸したが、2人の子どもたちには是非勧めたい。」

など今までのシンポジウムよりより具体的な形で提供できた。

3 グローバル人材育成における日本語の役割

日本語教育は、上記2を見てもわかるようにそこには留学生だけでなく、日本人が存在することが見てとれた。日本での留学生にとって、日本語は言語としての知識・習得以上に各自の留学目的を達成するための道具であり、また意見や交渉、コミュニケーションなどを通して人として異国に溶け込み、心の安定を支える大切なものである。日本人にとっては、日本語教育のクラスで、大学のシンポジウムなどで、留学生と係わり意見を交わし、時には共に学ぶことで、外に目を向けるきっかけを得ることができる。ここに日本語教育の役割があると思われる。日本人学生・留学生・さまざまな年代・立場の地域とのパイプ役が日本語教育だと思われる。

大学や地域のグローバル化は、積極的な人材だけが対象ではなく、全体の底上げがあって、はじめてグローバル化へ向かうことになるのではないだろうか。日本・日本人の文化・習慣・考え方、常識などを学び、それを踏まえて、日本語を使って日本で勉強や研究をしたり、自分の意見を言ったりしている留学生は、日本が考えるグローバル人材の入口を少し踏み出し、まさに発展途中の人材ではないだろうか。この留

学生と交流を一步踏み出し、何かを成し遂げる体験は、日本人にとって、今までの環境に一石を投げかけ、外に目を向ける気づきが期待される。この布石の次のステップに大学がいろいろな形で英語学習の場が必要であろう。留学生との協働を経験して、外国語を身に付けたい、留学してみたいという「思い」がなければ、どんなに英語の必要性、海外へ出てみる意義を話しても、関心はあるものの一步が踏み出せない学生にとっては、状況は変わらないと思われる。小学校の児童が「かっこいい！いつか自分も外国語を身に付けたい。留学してみたい」という「思い」が原点ではないだろうか。この状況をうしろからぼんと押し出すのが、日本語教育のグローバル化の中で果たせる役割ではないだろうか。1ステップが日本語教育で、次の2ステップが英語教育というこのステップ1、ステップ2の組み合わせは、大学全体の底上げに効果的だと考える。

4 終わりに

センターのこれからの課題は、日本語教育の役割を踏まえて、留学生と日本人(学生・地域)に「場の提供」をいろいろな形態・内容ですることであろう。単なる楽しい交流も決して無駄ではないが、グローバル人材育成と考えたとき、授業にしてもシンポジウムや催事にしても共に成し遂げる協働という視点は不可欠である。留学生は、日本人ではなくまだまだ学ぶべきものがある学生達で、日本人学生と同じクラスで同じ授業を共に学ばばいいというものではない。日本人学生の成長や気づきを図ると共に留学生の学習効果も考え、時には、学期の必要時だけ合流し、協働を図るなど教育にのっとった視点で事前の入念な検討・準備及び効果の予測がこれからも必要だと思える。

参考文献

- 石井恵理子（1997）「国内の日本語教育の動向と今後の課題」『日本語教育』94号
- 西口光一（1999）「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」『日本語教育』100号
- 大石寧子・上田崇仁他（2005）「終日一教員担当制の引き出す学習環境の安定と言語運用能力の係わり」『日本語教育方法研究会誌』
- 池田玲子・舘岡洋子（2007）「ピアラーニング入門－創造的な学びのデザインのために」ひつじ書房
- 加藤 巖他（2009）『国際理解教育プログラ

- ム「アジアシリーズ」の実践と効果-児童向けアンケートの結果を中心として」『和光大学総合文化研究所年報「東西南北」』P174-192
- 林原 慎 他 (2010)「小学校国際理解教育における国際交流学習効果」『広島大学学部・附属学校共同研究機構紀要』第 38 号 P41-46
- 大石寧子 (2012)「日本語教育を支援する『サポーター』の現状と課題」『徳島大学国際センター紀要』P19-25
- 牧野成一・鎌田修他 (2001)「ACTFLOPI 入門」アルク
- 大石寧子 (2006)「『留学生センターにおける地域主導型プログラム』の始動への方策とこれから」徳島大学国際センター紀要 2 号
- 大石寧子・遠藤かおり・石田愛 (2008)「就職支援のためのプロジェクト・ワークーアジア人財 PBL 授業」徳島大学国際センター紀要 5 号
- 大石寧子 (2013)「地域の国際化と日本語教育の連携の試みー『外国人児童支援』を出発点として」徳島大学国際センター紀要 2013 年度版
- 佐藤 学 (1997)「学びの対話的实践へ」『学びの誘い』東京大学出版会 P49-91
- 徳島県教育委員会学校政策課 (2013)「徳島の学校を理解するためのハンドブック」